



## 「地場銀行業の消長と小樽経済（後編）」

小樽商科大学ビジネススクール 齋藤 一郎

函館に本店を置く百十三銀行は、第一次大戦に端を発する好景気と旺盛な資金需要に応えるべく、資本金を倍額に増資し（1918（大正7）年）、預金調達を企図した出店に着手した。小樽においては、既設の小樽支店に加えて、入船町と花園町に出張所が開設され、同行の支店・出張所数（9ヶ店）の1/3が小樽に配置されることとなった。このことは、当時の小樽が函館と並ぶ金融上の要地として認識されていたことを物語っている。

この後、百十三銀行は、1922（大正11）年に函館銀行（1896（明治29）年設立）との合併を果たす。戦後恐慌（1920（大正9）年）が銀行経営を揺さぶる一方、第一銀行をはじめ、函館以外に本拠を置く銀行のシェアが伸長し、その対抗措置として合併に至ったものである。これにより、同行は北海道拓殖銀行（1900（明治33）年設立）に次ぐ有力行へと変貌した。だが、この時、百十三銀行の裡には、ほどなくしてその命運を左右する危機の芽が潜んでいた。

舞台は東京支店。1921（大正10）年と1925（大正14）年の2回に亘り、百十三銀行は所謂「引っかけり」に遭い、殊、1925（大正14）年の事件については、高利貸しの筋から世間に露見する事態となった。その被害額は、1927（昭和2）年における業容との対比で、年間利益の3倍強、払込資本金の4割強にも上った。このことは、後に、同行が北海道銀行（1906（明治39）年に小樽銀行から改称）に吸収される伏線となる。

一方、1897（明治30）年に本店を小樽に移した余市銀行は、移転を機に名を小樽銀行へと改めた。翌年以降は、古平支店、増毛支店を開設し、小樽、余市の既存店舗と併せて、北海道西岸沿いに店舗網を拡げていった。さらに、1906（明治39）年には、北海道商業銀行（前身は、1891（明治24）年に設立された屯田銀行）を吸収し、行名も北海道銀行に変更した。北海道銀行は、北海道商業銀行の店舗とともに、国庫ならびに北海道

庁の金庫事務を承継し、これにより、同行は地場有力行としての地歩を固めていったのである。

その後、北海道銀行は1913（大正2）年に資本金を倍額に増資し、一路、業容の拡大へと邁進した。しかし、「急激ナル業務拡張ノ結果営業却テ不振ニ陥リ日本銀行ノ援助ヲ得テ整理ヲ行フノ止ム無キニ至リ」（北海道拓殖銀行『北海道金融史』1918（大正7）年）、資本金の半減、内部留保（積立金）の取崩と、日本銀行からの低利融資によって経営の立て直しが図られた。

そして迎えた1928（昭和3）年。百十三銀行においては、戦後不況が尾を引き、多額の不良債権を抱える中で、1927（昭和2）年に起きた金融恐慌が経営に追い打ちをかけた。先年の「引っかけり」以来燻り続けてきた同行の経営に対する不信が、預金流出となって現れた。この事態に自らの行く末を憂慮した百十三銀行は、久しく競合関係にあった北海道銀行に合併を打診。設立以来、半世紀に及ぶ行史は、北海道銀行による吸収合併というかたちで閉じたのである。これにより、函館を本拠とする銀行は姿を消し、小樽は北海道唯一の金融機能の集積地として、その名を馳せることとなる。

北海道銀行による百十三銀行の吸収合併は、同行になお一層の業容拡大をもたらし、北海道拓殖銀行とともに、双頭体制が築かれていく。だが、日本経済が戦時統制色を強める中で、金融監督当局は既に銀行合同の最終プランを描いていた。「管内本店普通銀行ハ当行（注：北海道拓殖銀行）ヲ中心トシテ合同一体ヲ為シ経営ノ合理化ヲ図ルコト共ニ金融統制ニ便ナラシムルヲ理想トスヘシ」（「管内銀行合同ノ理想」日本銀行小樽支店、1940（昭和15）年）。1944（昭和19）年、北海道銀行はこのシナリオに沿うかたちで北海道拓殖銀行に吸収された。これ以降、函館と余市を源流とし、小樽に集積された金融機能は、札幌へと移っていった。